

二部の学生募集停止をどのように受け止められるだろうか



佐々木重人
専修大学長

時代の要求に応える 学校であり続けるために

新年あけましておめでとうございます。専修大学は、2020年の創立140周年に向けて昨年より神田新校舎の建設工事が始まり、国際系新学部設置を見据えた準備も本格化していきます。また、本年4月からはビジネスデザイン学科とジャーナリズム学科が新たにスタートするなど、次代に向けてさらに魅力と輝きを増していきけるよう、変わろうとしています。

その一環として、二部は2020年度以降の学生募集を停止することになります。専修大学は1880年に夜間2年制で法律と経済を学べる学校として誕生した歴史があります。そのため、二部を廃止することについては丁寧に議論を重ねた上での決定でした。

そこで、創業者4人は今回の決定をどのように感じたのか、ぜひ尋ねてみたいと思いました。ただ、否定されることはないだろうとも思っています。設立当時、創業者4人は無給で指導にあっていたといいます。彼らも日中仕事をしなければ自分たちの生活が成り立たない状況だったのです。もちろん、学生も勉学だけ

に集中できるほど裕福な人ばかりではありません。そのような中、日本を支え発展させる有為な人材を育てるには、夜間学校であることが大きな意味をもっていました。

一方、現在は大きく状況が変わっています。フルタイムの職に就いている二部学生が大幅に減少してきたというデータもあります。リカレント教育のように社会へ出てから学び直す場を大学に求める声も強くなっています。このような背景を受けて、持続的な学びの機会を提供すべく、社会人向けの枠を検討するなど、志ある人材を育てるために、現在の状況に即した大学の在り方を考えた結果が、二部の廃止なのです。だから、「信念に基づいた決定であればいい」と言ってくれると思っています。

相馬先生は、軍人を目指すも持病で叶わず、彦根藩からの欧米視察員に選抜されましたが、予期せぬ事情で渡航不可能になるなど、いくつもの壁にぶつかりました。それでも諦めず志を貫徹した不屈の精神をどのように育んだのかも聞いてみたいですね。私は多感な時期を過ごした彦根藩の原風景が関係していると思っています。先日、彦根城の天守閣に登り、そこから見える琵琶湖や彦根の風景を目の当たりにしたとき、この雄大な風景が大きな心を育てたの

だろうと感じたからです。見ているうちに、細かいことを気にしても仕方ないという伸びやかな気持ちになりました。

信念を貫いたという意味では、田尻先生も目賀田先生も駒井先生も同じです。専修大学は、国造りの礎となる法律と経済を日本語で学べる環境をつくるという4人の信念によって誕生した学校です。その志を受け継ぎ、2020年に向けて力を尽くしていくことが私たちの使命だと思っています。

目賀田先生は、塩の専売制度をつくることで、財政健全化に寄与されました。こういった工夫は見習うべきだと思います。神田新校舎建設にもなっているチェア募金も、そんな工夫の一つです。あなたの寄付金が椅子となってこれからの専大生を支えることになると思っていたのであれば、久しぶりに母校へ足を運んでみようと思ってもらえるかもしれませんね。

神田新校舎の最上階には校友も利用できるサロンを、1階には気軽に立ち寄れるカフェを設置する予定です。校友の皆さんにも母校へ足を運んでいただければと思っています。

(談)